

梅毒の増加に直面して：解説と提言

梅毒からあなたを守るために

1. 梅毒という病気を知っていますか。
2. ここ5年で梅毒が増えています。
3. 梅毒にかかるとどのような症状が出るのでしょうか。
4. 梅毒の診断はどのように行われるのですか。
5. 梅毒はどのように治療するのでしょうか。
6. 梅毒に感染しないためには何に気をつければよいのでしょうか。

1. 梅毒という病気を知っていますか。

梅毒は性行為（性交渉、セックス）によってうつる、性感染症の一種です。

梅毒に関しては、日本では西暦 1512 年に初めて明白な記録がありますが、それまでに日本を含め世界中ですでに流行が始まっていたといわれています。梅毒の原因となるのは、梅毒トレポネーマという細菌です。この菌が性行為によって、ヒトからヒトに伝染して病気がうつるのです。日本でも戦国～江戸～明治時代にかけては、多くの患者がいたということが、さまざまな記録から分かります。第 2 次世界大戦後、1949 年には日本で年間 17 万 6 千人余りの患者が発生したと報告されていますが、この頃から、特効薬である抗生物質ペニシリンが実用化・普及し、10 年ぐらいの間に激減し、1990 年代には年間 500 人程度の発生にまで抑え込まれました。

2. ここ5年で梅毒が増えています。

1999 年に感染症法が施行され、それまでの性病予防法から、梅毒の発生状況を把握する体制が引き継がれました。2000 年から 2012 年までは年間 500～800 人台を推移していましたが、2013 年に 1200 人を突破し、以降、年々急増し、2017 年には 5820 人に達していません（図 1）。5 年間で 6.7 倍に増えたわけですが、梅毒発生は医師による届出制で把握されていますが、届出基準に達していなくても実際は梅毒である症例も含めると、本当はもっと多くの梅毒患者が発生していると考えられます。梅毒にかかる年代は、男性では 20～40 代、女性では 20～24 歳に多く、性感染症としての特徴が表れています。その結果、母体から胎児に病気がうつる「先天梅毒」も増えています。

3. 梅毒にかかるとどのような症状が出るのでしょうか。

性行為による感染から 3～4 週間で、性器に軟骨に似た硬さ（耳たぶの硬いところと同じくらい）のしこりができ、中心部から崩れてくる（潰瘍化といいます）のが典型的な第 1 期顕症梅毒と呼ばれる症状です。普通、痛みを感じません。同時に、太ももの付け根（鼠径部

と言います)のリンパ節が腫れることが多く、それも痛みを伴いません。性器以外にも、唇や乳首にこのような病変が生じることもあります。これらの病変は放っておくと、消えてしまうことが多いのですが、治ったわけではありません。その後、感染から約3か月で全身の皮膚にバラ疹と呼ばれるピンク～赤色の発疹が出たり(写真1)、手のひら・足の裏に梅毒性乾癬と呼ばれる真ん中がかさかさとした直径数ミリの暗赤色の発疹が出てきたりします(写真2)。口の中の粘膜に白っぽい斑紋が見られることもあります(写真3)。これらは第2期顕症梅毒と呼ばれます。これらの変化も放っておくと、無くなってしまいうことが多いのですが、治ったわけではありません。無治療で放っておくと、やがて、神経梅毒や全身の梅毒病変へと進展していくことがあります。

4. 梅毒の診断はどのように行われるのですか。

上記の症状は典型的なものですが、このような症状が現れない梅毒もあり、全く症状がないこともあります。一方、視力低下(ぶどう膜炎)、頭痛、関節炎、腎炎などをきたすことがあります。梅毒は、多彩な症状や病態を示すことから、「偽装の達人」とも呼ばれます。梅毒を診断するには、血液検査(梅毒血清反応検査あるいは梅毒抗体検査と呼ばれます)が不可欠です。数mLのごく少量の採血で検査できます。上記の症状が起こればもちろんのこと、たとえ無症状でも性感染症にかかっているのではないかと気になる(心配な性行為をしてしまったあとなど)ときは、検査を受けるべきです。保健所では、無料・匿名で梅毒血清反応検査を受けることができるか、もしくは相談に乗ってくれます。症状が出た場合や上記検査で陽性となった場合、泌尿器科、産婦人科、皮膚科などを受診しましょう。

5. 梅毒はどのように治療するのでしょうか。

抗生物質であるペニシリンが効きます。医師による処方が必要です。日本では内服薬が使われます。第1期梅毒では2～4週間、第2期梅毒では4～8週間、1日3回の服用が必要です。アレルギーなどでペニシリンが使えない場合にも代わりに効く薬があります。いずれにしても決められた期間、治療を続けることが大切です。治療には健康保険が使え、たとえば4週間の薬剤服用と検査費用とで、自己負担は約7000円となります。梅毒血清反応検査の数値が下がって安定化することを確認して、治癒と判定し、治療を終了します。

6. 梅毒に感染しないためには何に気をつければよいのでしょうか。

梅毒に限らず、性感染症全般について言えることは、感染している人と性行為をしなければ、性感染症にかかることはありませんが、誰が感染しているかはわかりません。「特定の相手としか性行為をしていないから大丈夫」「自分の相手は安全」と考えがちですが、それは誤りです。検査をしない限り、感染しているかどうかはわかりません。

どんな場合でも性行為においては、最初から必ずコンドームを着用することが大切です。オーラルセックス(フェラチオなど)においてもコンドームが必要です。コンドームをつけ

ずに陰性交してもよいのは、愛する人と子供をもうけ、責任を持って育てるという意思があり、それができる環境にあるときです。

梅毒はキスでうつることもないとはいえません。コンドームを着用して性行為をすることは重要であり、そのことにより梅毒に感染するリスクは低くなりますが、完全に防ぎきれないこともあります。

繰り返しますが、梅毒は性行為でうつる病気であり、握手など日常的な接触では感染しません。しかし、梅毒の菌をもった相手とコンドームを着用せずに性行為をすると 3 割程度の確率でうつってしまいますので、くれぐれも注意してください。

図 1



写真 1~3





発行：日本性感染症学会、日本感染症学会、日本化学療法学会、
日本環境感染学会、日本臨床微生物学会